

北海道師範塾 塾頭通信

「教師の道」

第604号 平成25年9月2日

風立ちぬ（2）

さて、映画のストーリーを簡単に紹介しましょう。

飛行機の設計家になる事を夢んでいた少年も大学生となって東京で学んでいます。

二郎が帰省していた実家から東京へ向かう列車の中、デッキでタバコを一服する二郎の帽子が風に取りられてしまいます。丁度そこに、女中らしき女性と一緒にいた少女（里見菜穂子）がその帽子を掴まえようと身を乗り出し、二郎は思わずその少女を支えます。礼をいう二郎に対し、その少女はポール・ヴァレリーの詩の一節「風立ちぬ」を引用し、それに二郎はフランス語で応えます。これが、二郎と菜穂子の出会いです。しかしその直後、大地がうなりを上げます。関東大震災の発生です。二郎は混乱の中二人を助けますが、名も告げず立ち去ります。やがて彼は大学を卒業し、飛行機の設計に携わる為、本社が名古屋にある「三菱内燃機株式会社」に就職します。工場の隣では牛を飼っているのを見て、友人から「完成した飛行機を各務原の飛行場まで運ぶのに、牛車を使うためだ。」と聞かされ、日本の国力の脆弱さに驚かされます。

二郎の設計した七試艦上戦闘機は完成し、いよいよテスト飛行が行われるのですが、試験飛行中に墜落し、失意に陥った堀越二郎は、傷付いた心を癒すため避暑地の軽井沢で暫く過ごします。そこで関東大震災以来別れ別れになっていた少女（菜穂子）と運命的な再会を果たすのです。二人はたちまち恋に落ち、婚約するのですが、彼女は結核を患っていたのです。

「美しい飛行機」を作ろうと、飛行機の設計に没頭する二郎。一方、結核と闘いながら彼を見守る菜穂子。この二人の愛は菜穂子の死によって終わりを告げる事になります。

そして二郎は、敗戦の日を迎えます。

二郎は、自分達が設計して来た無数の戦闘機達の残骸の前に立ち尽くしています。ひたすら美しい飛行機を作る事に精力を傾けて来た二郎には、余りにも残酷な風景です。絶望感に打ちひしがれる二郎に、今は亡き菜穂子が現われ「生き抜く様」に語り掛けます。

この映画は、結核に侵され闘病を続ける女性との運命的な出会いと別れを軸に、美しい飛行機を作るという夢を追い続けた一人の青年の半生を描いたものです。

宮崎駿監督は、「私達の主人公二郎が飛行機設計にたずさわった時代は、日本帝国が破滅にむかってつき進み、ついに崩壊する過程であった。しかし、この映画は戦争を糾弾しようというものではない。ゼロ戦の優秀さで日本の若者を鼓舞しようというものでもない。本当は民間機を作りたかったなどとかばうつもりもない。自分の夢に忠実にまっすぐ進んだ人物を描きたいのである（プログラム「風立ちぬ」から）」と述べていますが、その製作意図は、映画を見ると良く伝わって来ます。

ただ、二郎と菜穂子の二人からは、次第に戦争に巻き込まれて行く事への苦悩や恐れ、疑問、そういったものが感じられないのは、私としてはどうしても物足りなさを禁じ得ません。

評論家・ジャーナリストの立花隆氏は、「風立ちぬ」という映画について、「この映画においては、零戦のメイキング・オブは一つのエピソードでしかない。メインストーリーは、明治以来西洋に追いつき追い越せで、急ごしらえに作った富国強兵国家日本が、富国にも強兵にも失敗し、大破綻をきたした物語だ。」と述べています。

彼らが生きた時代は、戦争が日常という時代でした。戦争遂行の為に、非常に多くのものが犠牲にされて来ました。

零式艦上戦闘機は、極めて完成度の高い、そして、美しい機体ですが、堀越二郎は、美しい飛行機を作る為なら戦闘機でも一向にかまわなかったのでしょうか。優れた戦闘機を作る事で、多くの若者達の命が失われていく事に、懊悩する事はなかったのでしょうか？

映像からは、堀越二郎の心の内を感じ取ることは出来ません。

如何に美しい飛行機を作るかという事に神経を集中していますが、時代の変化や日本がどういう方向に進もうとしているのかについて、殆ど関心を示そうとしていません。こうした彼の姿は、堀越だけのものではなく、当時の日本国民の平均的な姿だったのだらうと思います。

国民は、殆ど事情も分からぬまま戦争に巻き込まれ、動員され、塗炭の苦しみを背負う事になりました。そうした怖さを、「風立ちぬ」という映画は間接的ながら表現しているように思います。（塾頭：吉田 洋一）